

『古代文学の表現史』 発表要旨と討論総括

82年度夏季セミナーは、八月二十四～六日の三日間にわたり、参加者二十三名を集めて行なわれた。本年度の総テーマは『古代文学の表現史』で、セミナー委員（斎藤英喜・清水章雄・高野正美・保坂達雄・森朝男）を中心に討議を繰返し、前年度までのセミナー活動を継承・展開すべく年度当初に決定を見た。内容として三つの柱を設定し（後述）、発表者を公募し、発表者・セミナー委員・フリー参加者を交えての予備討論を反復するなど、近年のセミナーの実施方法に倣ったことというまでもない。

総テーマの「表現史」とは、文学固有の論理に立って文学史を再構成する試みとして、表現の史的变化の要因を、表現それ自体が持つ力学に求めて、そこに自立した表現の歴史を構成してみようとするものであった。すでにここ数年来のセミナーを通して、例えば文学の誕生（発生）を問いつつ、文学のいわば祖型を想定してみることによって、古代文学をトータルに展望する視座に立とうと試みたり、古代文学を一つの様式として把握することにより、その史性を定位しようとする試みたり、伝承とその変容の仕組みにメスを入れようと試みたり等々、様々の曲折を経ながらわれわれは同じ課題を展開的に探求してきたと言える。そして昨年度セミナーにおいて、セミナーと合体しつつ刊行が続けられてきたシリーズ（シリーズ古代の文

学、武蔵野書院刊）の終刊を機に、一応それまでの方法を総括してみる試みから、『古代文学の方法』を総テーマに討論した。そこでは新たに、古代文学の表現を〈制度〉として把握しようとする方法も登場した。

そうした過程の中で、われわれが常に見据えてきていたものは、文学の最も具体的・客体的な質であるところの〈表現〉であったと思われる。そこにわれわれの積み重ねてきた方法的模索を通しての〈表現論〉が試みられるべき必然があった。すでにそれは、一昨年の80年度セミナー『古代詩の表現』に、テーマとして掲げられるとあった動きをも持ったし、その前年の79年度セミナー『古代文学の変革』もまた古代国家の完成期としての七世紀を一応の具体的焦点にもくろみながら、表現の変革としての書記行為の成立問題を追求する中で、同じような課題への取組みがなされた。今年度の〈表現史〉は、そうした課題をさらに明瞭に、文学史をめざす方向へ意識化しようとする試みたものであった。

われわれは次に〈表現史〉の具体的課題として、三つの柱を立てることによって、その内容を作り出そうと試みた。A語りから散文へ、B語りから歌へ、C漢詩文と出逢う和歌、の三つである。そのうちCは他の二者とやや次元を異にする如くであるが、あえてそれ

にこだわったのは、いわゆる漢詩文の日本文学への影響や享受の論が、一般に完成体としての彼我の作品相互の対比を無条件に前提にしているかの如くであって、日本文学の形成論としての理論的検討において不十分な面が見られる点を考えてみたかったし、発生論・様式論・伝承論・制度論といった視角の中で、われわれもまたその問題に半ばぶつかり、半ば取組んでもきていたからである。以上の三つの柱をさらに具体化し、討論にふさわしいように、それぞれ一つずつの原典の対象に、各課題を結んで、われわれは三つの柱を、Aうけひ神話をめぐって、B「菟原処女の墓を見る歌」をめぐって、C「世間の住り難きを哀しむる歌」をめぐって、の三つに置き換えてみた。そして各二名計六名の発表者を募ったのである。

ところが発表者が決まり、予備討論に進んでゆく中で、われわれは様々な難関に直面せざるを得なかった。難関の根本的要因は、〈表現史〉のイメージが人によってかなり異なっていることにある。それはセミナーにまで持ちこされ、最終日の総括討論においても、例えば、作品の表現史の価値とは別個に、いま一つ表現的価値というものが存在するのではないか、発生論、様式論、制度論がそうであったのとは異なって、〈表現史〉は方法的概念にはなりえないものではないか、等々といった意見が出た。それらの疑問の背後には、〈表現〉という、実体そのものを指す概念を、いきなりしかも純粹に想定してしまうと、その作品の史的な生成やそれゆえにその作品が持つことを余儀なくされている史的限界性といったものが見渡されにくい、といった問題があったようだ。その点をめぐって総括討論では、歌謡・和歌・物語等々という形態を表現様式ないしは文体の問題として問うべきではないか、という意見が出た。文学

史をジャンルの交替の歴史として把握する方法はすでにあった（西郷信綱の『日本古代文学史』）が、それを超えてこれを表現史といった方向へどう細密化してゆけるか、といった点などについては、討論を深めることができなかった。

一方また制度論に立脚する参加者たちからは、制度と表現史との関係として書記行為の問題がしばしば論議的とされた。これをめぐっては、制度論的視点が表現の構造的な分析しえても、表現史の動態をどこまでとらえうるものか、という疑問が提出された。その点もあまりはかばかしい展開を見せずに論議が終息してしまった。例えば文学の形態、ことに散文の諸形態と制度との架橋といった点などが理論的にかためられる、ということにならないと、この問題は普遍的なかたちでは解決しないかも知れないが、「うけひ神話」に対する呉哲男の報告などは、古事記の表現史的地位をこの角度から切ったものとして、ある種の成功を収めている。

三日間にわたる討論を通して、なお〈表現史〉の統一的イメージは、十分に形成されたといいたいがたいままに終わった感を否めない。一つには〈表現〉という概念そのものが相当に手垢にまみれたものであって、それが幾重にも議論を混乱させていたように見える。〈表現と主題〉といった古典的な命題にひきづられた側面もなくはなかったり、いろいろの概念が曖昧のままに錯綜した。不成功な部分も多かったことを企画の側として反省もしているが、どうじにまた発生論、様式論以来、必然のテーマを追ったのだという連続性は明らかに確認できて、それなりの意義はあったものと信じている。

（文責 森 朝男）